花と融合 多彩に

世界バラ会議福山大会では、福山市を中心とする備後地域の関連グッズが会場や市内各所に登場する。バラとコラボレーションするのは、日本一の生産量を誇るデニムや木工、保命酒…。個性あふれる企画が、「ばらのまち」であるとともに「ものづくりのまち」でもある福山の魅力を発信する。　（筒井晴信）

福山を象徴するバラとデニムのコラボ商品。バラの枝を使った生地で作ったジーンズや花のほか、独自技術で花をデザインしたバッグやワンピースがそろう（撮影・山本誉）

デニム ものづくり発信

新製品続々 SDGsも意識

福山市は、国内デニム生産の8割を占める一大産地。関連企業は多く、大会に向けてバラとデニムをコラボさせた新製品が相次ぐ。

篠原テキスタイル（同市駅家町）は、捨てられるバラの枝を原料にしたデニム生地を作り、仕立てたジーンズを初披露する。バラの枝を砕いて粉末にしてパルプに混ぜ、直径1ミリ弱の糸を製作。裏地となる横糸として綿の縦糸と編み合わせてデニムを織った。

「福山の二つの象徴を通じて、地域で進むサステナブル（持続可能）な取り組みを発信できる」。篠原由起（ゆうき）社長（42）は力を込める。

福山は江戸時代から綿花の栽培が盛んで、戦後も備後絣（がすり）の生産で栄えた。今も繊維関連企業が集積し、デニムの生産が盛ん。海外の高級ブランドとの取引も多く、持続可能な開発目標（SDGs）への意識も高い。

糸の製作から染色、織布、縫製まで市内の4社で行う。篠原社長は「関連企業がそろう福山だからこそできた製品。資源の大切さに気付くきっかけになれば」と願う。

バラのデニムは、大会会場でも活躍する。参加者に配られる大会の資料は、ロゴを刺しゅうしたバラのデニム製バッグに入れて配られる。

セレクトショップ運営のアクセ（尾道市）は、バラのデニムを花そのものに「再現」した。デニムで作った花びらを重ね合わせて、花とつぼみを表現。茎も生地で覆う。

デニムに色の濃淡をつけて、変化を演出する。素材となっているパルプを溶かさない脱色法を採用した。高垣道夫専務（51）は「高い技術力を世界に伝える機会」と期待する。

独自技術で新製品を打ち出したのは、染色の山陽染工（福山市一文字町）。デニムから濃淡をつけて色を抜く「段落ち抜染」の技術を使い、英国のブランド「リバティ・ファブリックス」の華やかなバラ柄を生地に描いた。バッグとワンピースに仕立てた。

福山はデニムの産地だが、BtoB（企業間取引）が主体で、ジーンズなど最終製品は少ない。

「福山のものづくりに興味を持つ人が増えれば」としている。

キリの板で御朱印帳 保

備後の伝統 息

備後地域の伝統の品とバラがコラボしたグッズも、地域色を放つ。

きり箱製造の曙工芸（福山市新市町）は、バラをデザインしたキリの板で飾り付けた御朱印帳を発売した。表紙と裏表紙に厚さ3ミリのキリの板を使い、レーザー加工でバラ花壇の模様をくりぬいた。裏表紙には大会のロゴもあしらう。

府中家具の産地、府中市に近い福山市北部には木工事業者が集まる。曙

キリにバラをデザインした御朱印帳を紹介する桑田社長（撮影・山本誉）